

## 自由論題 6 「社会の動態」

### 報告 2

佐藤由利子（東京工業大学）

「日本留学生の頭脳循環と経済連携に果たす役割ーインドネシア人留学生を事例としてー」

#### Brain Circulation of Graduates of Japanese HEIs and their Role in Economic Collaboration

1950年代より人材養成分野の政府開発援助として実施されてきた日本の留学生受入れ政策は、2008年の「留学生30万人計画」を契機として、日本への人材獲得を目指す方向に転換した。背景には、経済のグローバル化と国内市場の縮小を背景とする企業の海外展開のため、留学生をはじめとするグローバル人材のニーズが高まったことがある。

留学生の留学国への定着は、従来頭脳流出と批判されてきたが、近年、留学国に移住した元留学生が、知識・技術の移転やネットワークを通じて出身国の発展に寄与するという頭脳循環の主張が行われるようになった。通信・交通手段の発達が移住国と出身国の行き来を容易にし、頭脳循環を促進しているという分析もある。他方、頭脳循環は、送出し国の経済発展段階、制度や政策、受入れ国の政策や制度などに左右されると考えられる。

このため本発表では、東南アジアでベトナムに次いで日本留学生が多く、日系企業の進出も盛んなインドネシア出身の日本留学生を対象とし、①日本に就職した留学生が、その後の移動や知識・技術の移転等を通じて、母国の発展に貢献する頭脳循環の現象が起きているか、②帰国留学生が日系企業等に勤務し、日本と連携する活動を通じて、日本と母国双方の利益に貢献するといった新しい形の頭脳循環が生じているか、という2つの視点から行った、質問紙および聞き取り調査の結果を報告する。

調査の結果、日本に就職した者が、帰国、出向、知識・技術の移転等を通じて母国の発展に寄与する頭脳循環の現象が見られた。また、母国の日系企業に就職した帰国留学生が、日本の働く文化や管理手法の知識・経験を活かし、企業を発展させ、母国の開発と日本の利益双方に貢献している現象も確認された。

アジアの地域経済統合の動きの中で、帰国者が日本と行き来したり、日本での研究やビジネスに参加する新しい形の頭脳循環は、経済の連携強化に極めて重要な役割を果たすと考えられる。